



矢作川河川敷での美術の実業（昭和45年頃、短期大学部幼児教育科）

## 宿望の大学設置

1

「女性は情操を大切にしなければなりません、それだけでなく、もっと勉強して知性を磨かないことには、これからの社会においての女性の地位向上は望むことはできません。そのような女性を一人でも多く、新設の大学で育てて、世に送り出すことができたらいよいと思います…」

「従来、行ってきた実学的色彩の強い短大教育だけでなく、新しい学問としての家政学の追求には、どうしてもアカデミックな場としての大学が不可欠であります」

昭和四十（一九六五）年四月に行われた教授会の席で、だいが、大学にかける期待、そして総合学園教育の柱としての大学を新設する必然性を話していた。

だいはこれまで抱いてきた宿志を教授会へ諮問したのだった。

これを受けた教授会では、大学進学率が上伸傾向にある状況を

考えて、「新設の機会としては妥当である」と答申、学園理事会の賛意を得て大学設立に向けてスタートした。

基本プランとして、大学学舎は岡崎市舩越町の用地に設置、近い将来には小堤町校地で高校と同じ居している短期大学も移設して、この地に大学・短期大学・岡崎城西高等学校を結集した一大キャンパスをつくることにした。

だが、教授会で大学の教職課程について論議を重ねるうち、計画が膨らんだ。

「これを機に思い切って短期大学部幼児教育科を設置しては……」

という提案が出てきたのだ。

この「ひょうたんから駒」のような提言には、学園拡充に積極的なだいま、さすがに時期尚早であると考えた。

——四年制大学の設立だけでも手いっぱい。そんなところへ更に短期大学の学科新設は……。

だいまには、財政をはじめあらゆる面で実現可能性に自信が持てなかった。

しかし、その頃、各地の市町村で幼稚園、保育園が増設される機運が高まっており、幼稚園教諭、保育園保育の不足が目立ち始めていた。教授会の強い進言もそこに理由があった。

だいまもそうした教育情勢を判断、結局、大学家政学部と短期大学部幼児教育科の同時設置を目指すことを決意した。



愛知女子大学（現愛知学泉大学）の昭和41年設立当時の校舎

大学の新設には、財政的な問題をはじめ設置基準に合う教員、図書確保など、様々な困難が横たわっている。それを数カ月でわかには準備しようというから大変だった。関係者の懸命の努力で設置申請に必要なすべての準備を完了した。申請期限ぎりぎりの九月二十九日に、「愛知女子大学、

同短期大学部幼児教育科設置認可申請書」を文部大臣に提出した。

新設大学の名称は「愛知女子大学」とした。このネーミングは、第三者には、愛知県に存在する女子大学だから単純にそう名づけたようにも思われがちだった。しかし、安城学園がこの名称を選んだのは、だいが「知を愛する女性」という表現を多用することからその趣旨をとらえたものであり、校名の決定に当たっては、教授会において全員一致で賛成されたのだった。

こうして多少の曲折はあったものの認可があり、昭和四十一年（一九六六）年四月、愛知女子大学家政学部と愛知女子大学短期大学部幼児教育科が発足した。

また同時に、幼児教育科の附属幼稚園として、安城市安城町字栗

ノ木の地に愛知女子大学附属幼稚園（現愛知学泉大学附属幼稚園）を開園した。学園が擁する幼稚園は既存の安城学園女子短期大学附属幼稚園（現愛知学泉短期大学附属幼稚園）とともに二施設となった。

認可申請を急いだこともあって周知が間に合わず、第一回の入学者は大学で二十名、短期大学部幼児教育科で二十九名と、小ぢんまりとした人数だったが、それだけに少人数教育できめの細かい理想的な教育が展開されていた。

安城学園女子短期大学（被服科、生活科、家政科）を中核としていたこれまでの学園の形態は、新たに愛知女子大学が核を担う存在となり、大学を頂点としたピラミッド型の教育体系を持った総合学園として第一歩を踏み出した。

これまで高校と同一キャンパスにあった安城学園女子短期大学の一部も岡崎の地に移り、安城・岡崎間はスクールバスが通って、学園としての統括性が保たれた。

大学発足にあたって、だいは大学の初代学長に就いた。だが、大学の発展を永く見届けることはできなかった。

---

### 3

昭和四十一年（一九六六）年は、学園にとって逝く人への愛惜が続いた年でもあった。



晩年の寺部だい

この年の三月まで安城学園女子短期大学学長だった二木謙三が、四月二十七日、九十三歳で逝去した。二木は、東京大学名誉教授、文化勲章受賞者、日本学士院会員という肩書をもつ、医学界における権威者だったが、だいとは知己で、その懇願を受けて快く十四年もの間、学長の任に就いていた。だいにとっては感謝し尽くせない一人であった。

それだけに、その訃報に気落ちもしたのであるか、その頃、健康がすぐれず安城更生病院に入院していただいは五月十八日、心不全症に急性肺炎を併発し、八十三年の生涯を終えたのだった。

生前の教育貢献に対し、従五位勲四等に叙された。安城市名誉市民ということもあって、六月七日に、安城学園体育館で安城学園・安城市の合同葬が行われた。

午前十時からは、学園の学生、生徒、園児三千二百四十一名による礼拝献花の儀が行われ、午後二時からは、石原一郎安城市長を葬儀委員長として葬儀・告別式が行われた。文部大臣、愛知県知事をはじめ千五百名もの参列があり、だいの教育の対する貢献と遺徳のほどが偲ばれた。

学園では、後任人事として、だいのもとで学園の経営と教育に携わっていた寺部二三子を理事長とした。だが、二三子理事長もまた、八月五日、入院先の安城更生病院で五十三歳の生涯を終えた。前年十月に手術を受け、退院後の療養もそこそこに大学設立準備に奔走しただけに、その激務が影響し

たのかも知れなかった。

わずか三カ月ぐらいの間に、理事長が相次いで亡くなるということは、偶然というより、運命の皮肉としか言いようがない。

葬儀を済ますと、理事会は杉原博を理事長に推し、停滞する事態の収拾に全力をあげた。しかし、学園をとりまく事態は深刻さを加えていた…。